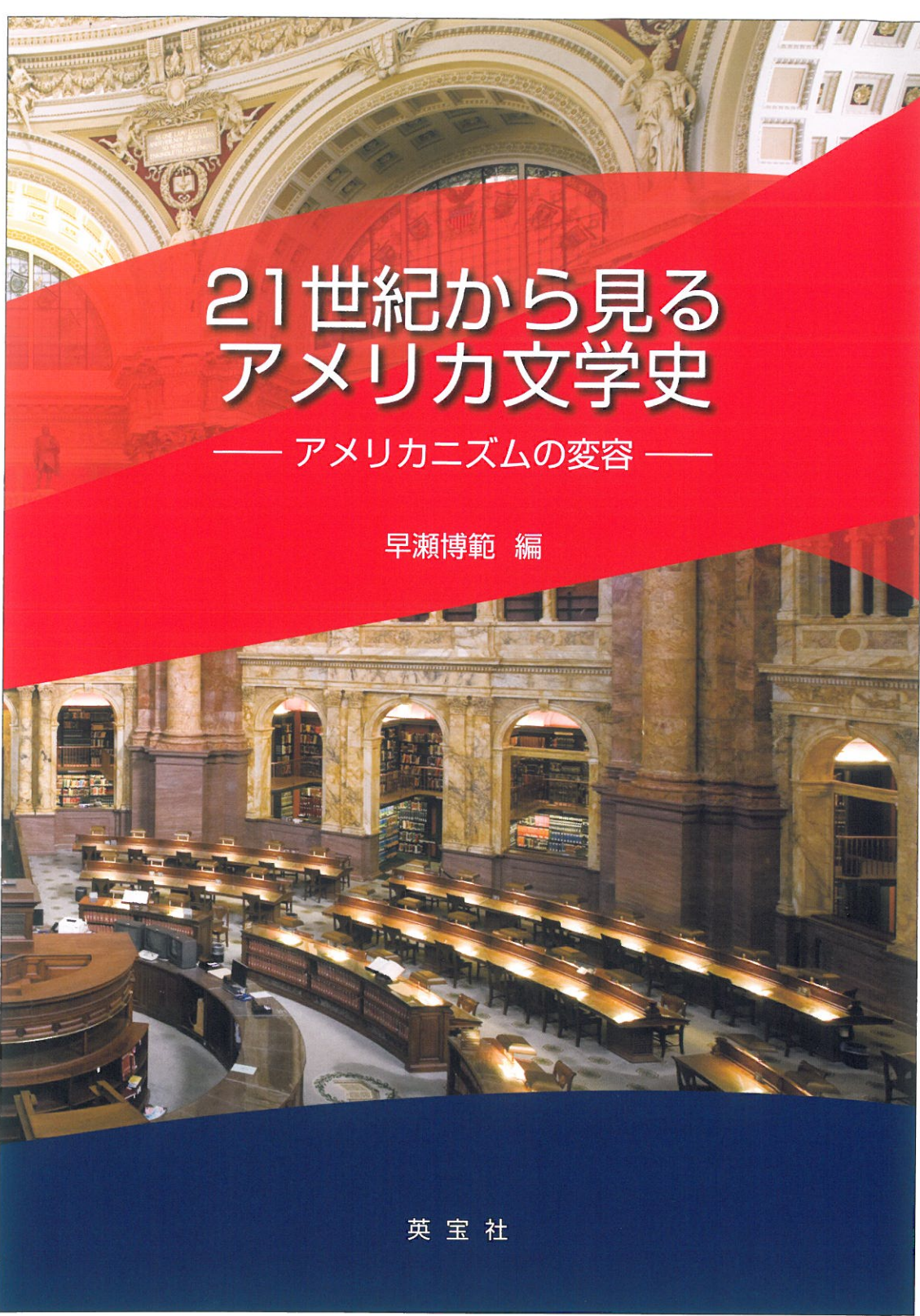




21世紀から見る アメリカ文学史

—— アメリカニズムの変容 ——

早瀬博範 編

英宝社

改訂にあたって

アメリカ文学史もそこに選ばれる作家や作品は、選定される時代の価値観によって左右されるものである。なかでもアメリカ文学ほど、時代に敏感な文学史はないであろう。その意味で、『21世紀から見るアメリカ文学史——アメリカニズムの変容——』も、出版から15年を経て、大きく書き換える必要性が感じられ、今回の全面改訂となった。

初版を編集している頃は、ちょうど2000年頃で、冷戦が終結し、新たな世紀に向けてアメリカが多文化主義、グローバリズムに押し進んでいた。しかしながら、この15年ほどの間に、アメリカは9.11同時多発テロを経験し、その後10年間に渡る「報復戦争」でかなり様子が変わってきている。初版からキーワードとした「アメリカニズム」にも変化が生じているようである。

そこで本改訂版では、冷戦終結をひとつの節目とした。初版では最終章にあたる第5章の時代区分を「1946年から現在」としていたが、そのような大きな枠組みでは、正確に捉えられないのではないかという思いから、本書では、冷戦終結を「戦後の終わり」と捉え、第5章を1989年までとして、新たに第6章を設け、「1990年から現在」とした。これが今回の改訂の最大の特徴であり、アメリカ文学史への新たな提案である。

上記以外は、完全に初版の理念を踏襲している。これらが本書への支持となっているからである。

1. 現代の視点に立った評価

文学史の研究も日々進んでいる。それに従って作家や作品の評価も変わってくる。当初の編集方針も「世紀の変わり目に立った時、アメリカ文学のキャンノン（主要作品）は何か」という新たな視点での評価や選別である。今回の改訂でも、現代の視点での新しい評価に基づき、すべての時代において再評価を変え、大幅改訂を行った。作家の入れ替わりも試みている。

2. 同時代作家の重視

新しい視点、とりわけ世紀の節目に立った時、過去の作家よりも、私たちと共に生きる同時代の作家や文学により関心がある結果、本書の半分以上を1950年以降の作家たちに割く形となったという点も、従来の文学史と大きく異なる点であった。この点も、本書では踏襲した。とりわけ2010年代の動きを詳細に捉えた点は、他の文学史にないものである。

3. アメリカニズムをキーワード

アメリカは建国から今日に至るまで、いつの時代でも「アメリカとは何か」「アメリカはどうあるべきか」を意識し、問い続け、探求し続けてきている。その時代の政治、文化、精神風土など様々な時代思潮が、当然文学にも影響している。時代ごとに、このアメリカニズムの変容過程を踏まえながら、文学はそれをどのように捉え、受容し、表現してきたかを探ることで、新たなアメリカ文学史の提唱を行っている。

4. 平易でコンパクト

本書が多くの方々に支持されたのが、そのコンパクトさにあったようだ。近年、アメリカ文学史の大学における授業でも、それを専門とする学生ばかりが学ぶということはむしろ稀になっている。アメリカやアメリカ文学を専門としない学生でもコンパクトで分かりやすくし、すこしでもアメリカ文学に興味をもってもらえることを編集の中心においた。他にも、重要語句は太字にしたり、欄外に出したりして、ポイントが一目ではっきりとわかるように配慮している。関連の写真も読者の興味を引くものを厳選している。

執筆は、現在、アメリカ文学の研究者として第一線で活躍している方々に、各専門の部分をお願いした。平易な言葉で、しかもコンパクトにまとめるという作業こそ、その作家に最も精通している人しかできない作業であるからだ。本書の狙いを踏まえ、短期間で魅力ある文章に仕上げていただいた。すべての執筆者に心から感謝したい。

以上のように、本書はアメリカ文学のエッセンスを、最も分かりやすい形でしかも最新の研究成果に則り提供している。一人でも多くの方が本書を通してアメリカ文学の魅力に触れてもらえれば幸いである。

最後に、英宝社の佐々木社長には、無理難題を快く受け入れていただいた。心より感謝申し上げたい。

2018年1月

編 者

目 次

第Ⅰ章 アメリカニズムの創成

(1492-1816)

時代思潮

1. 植民地文学
2. ピューリタン文学
3. リパブリカニズム

コラム ネイティブ・アメリカンの文学

第Ⅱ章 アメリカニズムの主張

(1817-1865)

時代思潮

1. フロンティア文学
2. 超越主義
3. 小説
4. 詩

コラム 女性作家の隆盛

コラム スレイヴ・ナラティブ

(Slave Narrative)

第Ⅲ章 アメリカニズムの展開

(1866-1919)

時代思潮

1. リアリズム小説 (i)
2. 女性作家の自己探求
3. 自然主義
4. シカゴ・グループ

第Ⅳ章 アメリカニズムの相克

(1920-45)

時代思潮

1. 詩
2. ロスト・ジェネレーション
3. 南部文学 (i)
4. 危機の文学

コラム ハーレム・ルネッサンス

(Harlem Renaissance)

第Ⅴ章 アメリカニズムの拡張と

多文化主義 (1946-1989)

時代思潮

1. リアリズム 127

(1) リアリズム小説 (ii)

(2) 南部文学 (ii) 130

(3) ミニマリズム 135

2. ポスト・モダニズム

(1) 不条理の文学

(2) ビート・ジェネレーション

(3) カウンター・カルチャーの文学

(4) サイエンス・フィクション

3. エスニック文学

(1) ユダヤ系文学

(2) 黒人文学

(3) アジア系文学

(4) ネイティブ・アメリカンの文学 (ii)

(5) カリブ系文学

(6) チカーノ (ナ) 文学

4. 詩

5. 劇

コラム ネイチャーライティング

コラム 大衆文学 (1)

第Ⅵ章 アメリカニズムの揺らぎ

(1990- 現代)

時代思潮

1. 小説

2. 詩

3. 劇

コラム 大衆文学 (2)

コラム 注目すべき作家

年表／索引

1. 小説

冷戦終結後、国境往来を描く小説（ボーダー・クロッシング・ナラティブ）が多く生み出されている。特にアメリカ・メキシコ間の国境を描いたものが多いが、そこでは個人の越境の物語が国境形成の歴史へと重ね合わされることになる。ほかのジャンルでも多くの小説家たちが人種、宗教、セクシュアリティ、言語などさまざまな境界越境を描き、相対化された価値観の中でアメリカという存在を捉え直そうとしている。

(1) Don DeLillo

(1936-)



ドン・デリーロはニューヨーク市ブルックリンのイタリア系家族のもとに生まれる。1958年にフォーダム大学を卒業後、しばらく広告業界でコピーライターとして働いていた。1960年代から徐々に短編小説などの執筆を始め、テレビ業界人を主人公に据えた第一作『アメリカーナ』を1971年に発表。『ホワイト・ノイズ』では、メ

White Noise (1985)

ディアが現実を形成する社会に巻き込まれる家族を風刺的に描き、全米図書賞を受賞した。

ケネディ元大統領の暗殺犯とされるリー・オズワルドをアメリカ社会の片隅でうまく利用されてしまうはぐれ者として描いた『リブラ』(1988)や隠遁した作家がテロリストに接近していく姿を描いた『マオ II』、廃棄物管理に従事する主人公を中心に1950-80年代の冷戦期アメリカを野球や核兵器などの史実も交えて描いた『アンダーワールド』など、アメリカの社会状況を前景化し、政治やメディア、消費社会に多大な影響を受ける個人を描くのがこの作家の特徴と言えるだろう。

Mao II (1991)

Underworld (1997)

『墜ちてゆく男』では同時多発テロ事件を描いた。表題の「フォーリング・マン」とは炎に包まれたワールドトレードセンターから飛び降りた人を再現するアーティストであり、

Falling Man (2007)

人々の抑圧された記憶からわき上がるかのように、たびたび作品中に登場する。主人公キースがテロ攻撃を受けたワールドトレードセンターから命からがら脱出して向かったのは別居中の妻リアンの家であった。リアンはアルツハイマーの老人たちに治療の一環でこれまでの記憶を書き出してもらう仕事をしているが、キースは同じく同時多発テロを生き延びたフローレンスと当日の記憶を語り合ううちに恋愛関係を芽生えさせる。このように、この作品は様々な記憶の共有が主題となっており、その中にはワールドトレードセンターに激突した飛行機のテロリスト、ハマドの記憶も含まれている。終盤、ハマドの記憶がキースの記憶に接続されるという特殊な構造は、多くの示唆を含んでいる。

(2) Paul Auster

(1947-)



ポール・オースターはニュージャージー州ニューアークのユダヤ系アメリカ人として生まれる。1970年にコロンビア大学院修士課程を修了後、フランスへ渡り、フランス語詩などの英訳を行ないながら、1973年には小規模な文芸誌『リヴィング・ハンド』を創刊。アメリカへ帰国後、1982年に半自伝的作品『孤独の発明』で本格的な

作家デビューを果たした。『ニューヨーク3部作』(1985-86)では、推理小説の枠組みを借りて言語や自己の不確実性という解けない謎を描き、高い評価を得た。1998年には映画『ルール・オン・ザ・ブリッジ』の脚本・監督を務めるなど、映画界でも活動している。

『ニューヨーク3部作』の第一作『ガラスの街』では作品内に「ポール・オースター」なる作家が登場させ、虚構と現実の境界を曖昧にすることで却って小説の持つ虚構性を読者に強く意識させるメタフィクション的手法を用いている。この場合、物語の内容だけでなく、その内容が「いかに」語ら

ニューヨーク3部作

City of Glass
(1985)

メタフィクション

れているかという語りの形式に注意が向けられることになる。オースターは他の作品でもこのような手法を用いることにより「語り」という行為が持ち得る力を問題にしている。

1990年以降の代表作に『リヴァイアサン』がある。作家のベンジャミン・サックスは1986年の独立記念日にビルから誤って転落するが、これを機に社会活動家へと変貌していき、アメリカの腐敗を糾弾するために自由の女神のレプリカを爆破して回るようになる。語り手ピーター・アーロンは作家仲間として執筆を続けるよう助言するが、サックスは自ら仕掛けた爆弾で命を落としてしまう。アーロンのイニシャルがオースターと同一であること、またベンジャミンはオースターの名ドルネームでもあることなどから、2人はどちらも彼の分身であると考えることができる。扇動的な破壊行為で注目を集めるサックスと作家であり続けるアーロンを通して、メディアが大きな影響力を持つ現代における小説家のジレンマや、それを超えて文学に寄せる信頼などが描かれている。

Leviathan (1992)

(3) David Foster Wallace

(1962–2008)



デイヴィッド・フォスター・ウォレスはニューヨーク州イサカ出身。哲学研究者の父と英文学研究者の母の間に生まれる。1985年に卒業したアマースト大学では英文学と哲学を専攻した。第一作『ヴィトゲンシュタインの箒^{ほうき}』(1987)は大学時代に興味を抱いたヴィトゲンシュタインの言語哲学を主題とした小説である。1987年にアリゾナ大学大学院創作コースを修了。作家活動の傍ら、ボモナ・カレッジ^{うつ}など複数の大学で創作を教えた。20年以上もの間鬱病を患っており、2008年9月、死後出版されることとなる未完の原稿『青白い王』を遺して自殺した。

ウォレスはテニス、映像理論、数学史、そしてロブスターの知覚ニューロンに至るまで様々なエッセイを残しているが、この幅広い興味関心は彼の大作『無限のたわむれ』にも反映

The Pale King
(2011)

Infinite Jest (1996)

されている。この小説では、テニスの才能に恵まれてはいるが精神的な不安定さも顕著な少年ハル・インカンデンザを中心に、戦争、テニス、映像理論、言語学、数学などにまつわる百科事典的な多数の物語が展開されていく。ウォレス特有の饒舌な文体はおどけた冗談っぽさを装っているが、常に高ぶり緊張状態にある精神の危うさをも表現している。

(4) Cormac McCarthy

(1933-)

コーマック・マッカーシーはロードアイランドの比較的裕福なアイルランド系の家に生まれる。37年には家族でテネシー州ノックスビルに移住した。51年にテネシー大学に入学しリベラルアーツを専攻するが52年には空軍に入隊。その後再び大学に戻るが間もなく退学し、第1作『果樹園の番人』(1965)を書いた。講演依頼なども断りながら隠遁に近い形で執筆を続けてきたが、1992年の『すべての美しい馬』が全米図書賞を受賞し、ベストセラーとなった。この作品はその後の『越境』(1994)、そして『平原の町』(1998)とあわせて『国境3部作』と呼ばれ、「ボーダー・クロッシング・ナラティヴ」として高い評価を得た。

All the Pretty Horses (1992)

ボーダー・クロッシング・ナラティヴ

この三部作は、石油産業の台頭、第二次世界大戦、核兵器開発などを背景にかつての「西部」が消えていくという終末的設定の中、アメリカからメキシコへ渡る少年たちが過酷な暴力にさらされ、身を焦がすほどの恋愛に苦しむ様子をスペイン語も交えて劇的に描いている。『ザ・ロード』では『3部作』で背景的に描かれていた終末的世界観が前景化され、壊滅した世界で何とか生き延びようとする父と息子の物語を通じて、極限状態における人間のモラルや尊厳といった問題が淡々とした文体で綴られている。

The Road (2006)

(5) Gloria Naylor

(1950-2016)

グロリア・ネイラーは南部ミシシッピ州出身のアフリカ系アメリカ人の両親のもと、ニューヨークに生まれた。ニューヨーク市立大学ブルックリン・カレッジで英文学を学び1981



年に卒業。そしてイエール大学の修士課程に進学、アフリカ系アメリカ研究で1983年に修士号を取得した。イエール在学中に発表した第1作『ブルースター通りの女たち』は人種差別や女性差別に加え、「居場所 (home)」の確立、個人間の絆、コミュニティーの意義などを主題に、南部から北部にやってきたマティ・マイケルをはじめ

め、ブルースター通りに住む人々の生活を描いている。

『ベイリーズ・カフェ』は、アフリカ系アメリカ人男性ベイリーが、自身の経営するカフェにやってきた客たちの人生を語るという形式の小説である。客たちは皆、売春婦や性的虐待を受けた女性など、社会の辺境で困窮している者たちであり、彼女たちがしばし息をつく空間としてカフェが存在する。しかし同時にカフェでは、裏口から出て行く客の行く末は死であることが示唆されるなど、カフェが物語空間としても機能しており、この小説が物語論（ナラトロジー）的技巧を凝らした構造になっていることを示している。（下條）

*The Women of
Brewster Place*
(1982)

Bailey's Cafe
(1992)

ナラトロジー